東光寺だより

御宝前楠木一本枯れる

東光寺の境内には五本の楠の大木があります。当地の植物学者、香田寿男先生によれば、ほとんどおよそ樹齢四百年以上たっているそうです。この度その寿命でしょうか、本堂の前の一本が残念ながら枯れてしまいました。東光寺の歴史の半分を見守っていてくれたこととなります。思えば虎哉和尚様もこの楠を眺め、またこの楠も虎哉和尚様を見ていたことでしょう。感慨深いものがあります。この度檀家の方々のご尽力で伐採していただきました。

副住職の説明を受ける伐採作業員の人々

楠は古来薬木として重宝がられ、樟脳が精製され、香りもよく、薬師如来の御前にふさわしい霊木であります。仏像や木魚にも細工されています。この度のクスも何か記念になるものにして長く保存したいと考えています。

東光寺のシンボル山門前の楠

脚下照顧（きゃっかしょうこ）

お寺の靴脱ぎ場には大抵この言葉が目に入ります。

看脚下ともかかれています。一般には、履物をキチンと揃えましょういう意味です。外国では一日中靴を履いている生活が多いと思いますが、日本では外出しているときはともかく、ほとんどの家が玄関で履物を脱ぐことになっています。そしてスリッパと変えることもあります。問題はその履物の脱ぎ方なのですネ。中には俺の靴だからどんな脱ぎ方をしてもとやかくいわれることはないという自己中心的なひともいますが、履いている靴はなるほど本人のものですが、いったん脱いだ履物はもう本人からはなれて一般のひとの目に触れる「社会の景色」なのです。駐車場におかれている車も歪んでおいてあると気になりますネ。景色は整っていると見たひとの心を癒します。

実践教育者の鍵山秀三郎先生は著書のなかで「履物がきちんとそろえてあるだけで、不思議と心が落ち着くものです。」といわれています。

脚下照顧　次号に続く

拝む手でそっとそろえる人の靴

今月の生け花　　**華道東山流　師範　　鷲見千恵子**

令和４年５月　文責　　東光寺　住職　　鷲見邦隆